

## 「潰瘍性大腸炎手記」 岩崎 裕次 39歳

2012年1月24日

地獄の扉から天国の扉へ

それは96年の秋に突然やって来ました。腹痛が数日前から続いていたと思つたら、ある日トイレが血で染まっていました。それからの進行が早く2~3日で完全な下痢になり、一日十数回の血便が続きました。当初はその当時大流行していたO-157なのではないかと思っていました。未だ25歳と若く、強気だったし仕事もあったので、しばらく様子を見ていましたが、余りに下痢が酷く、渋々病院に診察に行きました。結果「潰瘍性大腸炎です。」と先生から告げられ「O-157じゃなくて良かった」と思ったのも束の間、その後に先生が続けて始めた話が悪夢の始まりでした。「今の医学では一生治りません」「一生薬を飲み続ける事になります」想像を超える様な最悪な話をお医者さんは淡々と無表情で続けました。そして、「ステロイドを沢山使うので1ヶ月程入院してもらわないと危険を伴います」と言う事でした。その日は頭の中で整理がつかなく、よく意味も理解できないと言うよりも、したくなかったので、とりあえずそんな事あるはずがないと、自力で治してみせると病院を後にして自宅に帰り、食事や民間療法的な事で安静にして数日間様子を見ていましたが、やはり一日十数回の血の下痢と腹痛に耐え切れず『地獄の扉』をたたいてしまいました。

この最初の入院は、約1ヶ月間でした。最初の一週間を絶食にし、食事の代わりに点滴。薬はプレドニン錠剤、ペンタサ、ステロイドの注腸を使用されました。その間ピタッと下痢が止まり、出血もなくなり、退院してからは全て普通の生活に戻りました。お医者さんからは「再熱と寛解を繰り返す病気なので、日々の生活習慣に注意する様に」喉下過ぎれば熱さ忘れる性格と、現実を受け入れたくない思いから、しばらくして直ぐに好きなものを食べて、少々ですがお酒も飲み始めました。

それから一年程経ったある日、また腹痛と共に出血しました。あの恐ろしさが蘇ってきて、それを消し去ろうと慌てて食事を又あっさりした物に変えて、地元の名所である温泉に通ったり、母親から勧められた健康食品等でその場を凌いで誤魔化していましたが、前回よりも悪くなる進行の速度が速く症状も悪化していましたが、

しまいには一人で立ち上がる事も厳しくなり、母親の運転する車で病院へ直行、緊急入院する事となりました。この時は前回と違う「潰瘍性大腸炎の名医」と地元でうたわれているO病院を知人から事前に紹介され診察を受けました。

O病院院長のM先生は今回はあなたが放ったらかしにしたお陰でかなり酷い状態にあるので、最悪大腸の全摘出を覚悟して下さい」「大腸全摘出をした後は一時は人工肛門にします」「炎症が酷くそのまま寛解したとしても又再発するので、大腸を取った方が良い場合もありますよ」と瀕死の私に対して過激な言葉を浴びせ続けたのです。更にM先生は続けました。「そうならない為にギリギリまで人体の耐え得る大量のステロイドを使って炎症を抑えます」との事でした。自分はもう腹痛と下痢が耐え難く辛すぎるのと、医学の知識も全く無くもはや思考能力も完全に停止寸前だったので、溺れるものはワラをも掴むとはこの事で、全てM先生の治療方針を受け入れました。

この入院では、点滴を鎖骨の下から入れるIVHを行い、40日間の絶食を余儀なくされました。IVHの点滴では食事の代わりに高カロリーの輸液とステロイド、朝晩の注腸が繰り返されました。毎日モルモットのようにベッドの上で食べる事も飲む事も出来ず、唯ひたすら大腸の全摘出だけは免れたいと天井を眺め神に祈る日々でした。このステロイド大量投与の結果10間～2週間で下痢と出血が徐々に止まり落ち着いてきました。その代償として副作用で顔面は真ん丸に腫れ上がり、目は飛び出し、顔全体はニキビで一杯になりました。鏡で映った自分の姿に悲しくなりました。そして信じられない様な情緒不安定に襲われ、突然涙を流したり、怒り出したり、「奇行」が目立つ事もありました。ステロイドの副作用の恐ろしさは顔の形や体調を変化させるだけではなく、精神もメチャクチャにしていく物だと思いました。

約2ヶ月の入院からようやく自宅療養に切り替えられる様になり退院しましたが、顔の腫れやニキビは中々治らず、3ヶ月～半年かけて徐々にしか治りませんでした。退院してからステロイドからペンタサに薬を切り替えて毎日飲んで、定期的な大腸検査を続けて、食事も消化の良いあっさりした物だけと気を付けていましたが、必ず1年経つか経たないかで、また大腸は下痢・出血・腹痛と再び暴れ出すのです。その時は仕事等でどうしても長期入院は難しく、10日間絶食してまたステロイドを使い、ちょっと症状がなくなったところで無理矢理退院しました。それから何回も必ず繰り返す事の疑問と、治らない物に何故薬を飲み続けるのかという疑問とで、薬を飲む事を止め、病院に行く事も止めま

した。そして食事も好きな物を食べる様になっていきました。「発症から10年以内にガンになる」とか散々お医者さんに驚かされていましたが、自分の人生、自分が決めてやると開き直って、どうせ死ぬなら、こんなモルモットの様な人生よりも好きな事をして死んでやると覚悟を決めました。

しかし症状は深刻で辛く、一進一退の生活を続けている申で、2009年春ふと「病気なんて必ず治る方法があるのではないか?」「この世に治らない病気なんてある訳ない」と、自分の今迄の考えを全て否定しました。そして、何かに取り懸かれた様に無意識の内に携帯電話で『潰瘍性大腸炎・完治』のキーワードを入力して検索を始めていました。そしてとうとう、松本医院のホームページにたどり着いたのです。丁寧で説得力のある、今迄全く聞いた事の無い松本先生の理論と沢山の具体的な内容の患者さんの手記を読んで、漠然と「これは絶対に治る」と確信しました。松本医院が大阪で、元々自分が大阪出身な事もあり、大阪人が「商売」で嘘を謳う筈がないと勝手にこじつけました(笑)。そして、2009年夏に初めて松本医院を訪れました。『天国の扉』でした。

遠く九州から遥々やって来たので、開院の1時間前に到着し一番乗りしました。時間が来て中へ入り受付をし、着席している間の約十数分間で院内はみるみる内に人が増えて、30分もしない内に満員状態になりました。その光景を見て鳥肌が立ち「やっぱり大丈夫だ、自分の選択は間違っただけだった」と再度確信しました。診察の時間が来て中へ呼ばれ先生の間診が始まりました。初めて見る松本先生は、スマートな容貌に穏やかな口調で、噂に聞いていた一言「治してあげるよ!」と、固い握手をして下さいました。それから先生の問いかけにこちらが長年の積もり積もった思いを吐き出すと、私の気持ちに呼応してくれるかの様に熱く、時には歯に衣着せぬ過激な口調でお話して下さいました。その様子は、さながら自分の敬愛する大阪漫才の雄、故・天才横山やすし師匠を彷彿させる程の迫力でした(笑)。

全ての診察を終えて、嬉しさから千鳥足で九州へと帰って行きました。しかし、ここからが本当の始まりでした。漢方薬を煮出す時間、煮出した漢方薬の悶絶する程の苦さ、漢方薬を1日3食前後と就寝前に飲む事の手間どれを取っても、やってみて大変な事に気が付きました。最初は、病院に来て薬を貰ってちょっと飲んだら直ぐに治るのだと安易に考えていたので、毎日規則正しく薬を飲んでいましたが、3ヶ月位経っても未だ症状が劇的に変わらない事に苛つき、薬を煮やし薬を飲む事を止めてしまったのです。2~3ヶ月位経ったか、薬を飲むのを止めてから、ふと「あれ?オレは一体何をしているのだろうか?」「他に方

法なんか無いのに一生この状態で生きて行くのか?」自問自答した結果「また漢方薬を貰って治したい」と思い直し、松本先生に電話した時、今でも忘れません。めちゃめちゃに怒られました。「オマエ本気でないんやったら止めとけ」凄い剣幕でした。しかし、凄く有難く嬉しかったのを覚えています。今迄のお医者さんにも治療で怒られる事はありましたが、そのお医者さん達は皆、自分の都合自分に迷惑がかかるとか、自分の点数に関わるとか、恐らく自分の利益の為に怒っている様にしか見えませんでした。しかし松本先生は、絶対的な信念と裏付けを持って私の為に怒ってくれました。

その時から「何としても自分を実験台にして絶対に治してやる。後に続く人の為にも、一生懸命やってらっしゃる先生の為にも、世の中で自分みたいに病気で困っている人の為にも」と。それからは頑張って毎日コツコツとマイペースで続けて行く様にしました。けれども、漢方薬の飲み方がまちまちだったり、自分の仕事柄やや偏った生活習慣が災いしてか、中々ベストの状態になりませんでした。確実に良くなっては行ったのでした。

それは、下痢の回数や出血量に表れていました。

ある日、また漢方薬を貰うために先生に電話した時に、先生が「調子はどないや?」私が「いや、未だちょっと症状が残ってまして」先生「そやけど、半分以上は治ってるやろ?」私「???」・・・また凄いなと思いました。昔聞いた事があるコップの水の話の皆さんご存知でしょうか?また目からウロコが落ちました。…コップに水が半分入っていたら『コップに水が半分しかない』と思う人間と『コップには未だ水が半分も入っている』と思う人間の差の話です。そうです、私は感謝の気持ちが一つも無かったのです。あの忌々しい入退院の日々は、コップに水が一滴も入っていなかった筈なのに、今松本医院の治療のお陰で、コップに水が半分も溜まっている事に全く感謝が無かったのです。

それからが早かった。その事に気付かされたのが去年(現在2012年1月)の7月。それからは更に劇的に良くなっていきました。

松本医院にかかる数年前までは、一日に十数回の血の下痢と腹痛で世の中を悲観していた私が、今では一日に1~2回程度の普通便、食事も美味しく食べられるので体重も増え、結果、集中力も生まれ精力的に物事をこなす事が出来、仕事もプライベートも充実しつつあります。そして最後に一番言いたい事は、仕事もスポーツも勉強も、そして病気も物事全て皆同じだという事です。

全て血のにじむ様な自分の努力と、同時に周りへの感謝の気持ち、そこから受ける周りからのサポート等がなければ得ることが出来ないという事を、

松本先生とその治療から学ばせて貰う事が出来ました。

治療も自分自身の器もまだまだなので、色んな事の『真理』を学んで病気はもとより、これからの自分の人生に活かしていきたいと思っております。

ありがとうございました。